

石川県七尾美術館だより

平成23年1月1日発行
編集・発行 石川県七尾美術館

第64号(冬号)



ISHIKAWA
NANAO
ART MUSEUM



春の所蔵品展

～いきものの表現～～新収蔵品を中心に～

「夜想曲」西房浩二(1960～)
第41回日展(2009)

展覧会紹介

平成23年1月4日(火)～

4月17日(日)

休館日については裏表紙をご覧ください

「冬の所蔵品展」

開催中～2月13日(日)

当館では開館以来、石川県ゆかりの作家を中心に、作品のご寄附、ご寄託をいただいております。今回はそれら所蔵・寄託作品を中心に、2つのテーマで絵画・彫刻作品など34点を展示します。

◆第一展示室

江戸時代の長谷川派と
加賀藩ゆかりの絵師を中心に

【主な作品紹介】

【蝦蟇仙人図】 がませんじんず 長谷川雪嶺 はせがわつれい (二七五五～一八三〇)

江戸時代後期制作 個人蔵

本図は蝦蟇仙人を描いたもので、特異な表情の仙人とは対照的に、仙人の頭にしがみついた蝦蟇が、なんともユーモラスです。片足を曲げて上げるポーズは、等伯64歳筆「禪宗祖師図襖」(京都市・天授庵)中の、猫を斬ろうとする南泉和尚と同じです。ちなみに、雪嶺の師は等伯4男の長谷川左近とされ、左近も等伯の「禪宗祖師図襖」を模した屏風を描いています。

長谷川雪嶺は、『長谷川家系譜』によると宝暦5年(一七五五)に生まれ、天保元年(一八三〇)



77歳で没したと考えられます。本図には「雪舟画家十三世長谷川法橋雪嶺筆」の款記があり、雪舟より13世と名乗り、法橋位に叙任されたことが分かります。名は信隆、幼名勘十郎。自得庵、華筆斎、自得庵、宗伯、雪嶺居士などを名乗りました。

【寿老人図】 じゆうろうじんず 矢田四如軒 やたしじよけん (一七二八～九四)

江戸時代中期制作 個人蔵

寿老人は南極星の化身で、寿命を司る神として民間に信仰が広まりました。本図は寿老人が鹿の体を抱え込むように座った姿で描かれ、鹿の顔は寿老人の後にあつて見えず、角だけが覗いているという面白い構図になっています。



矢田四如軒は享保3年(一七二八)加賀藩年寄衆前田土佐守家の家老の次男として金沢に生まれ、寛政6年(一七九四)77歳で没しました。江戸時代中期に活躍した武人画家で、本名は廣貴、通称は六郎兵衛、雅号を四如軒、四如翁といいます。元文2年(一七三三)家督一二〇石を相続し、52歳の時に土佐守家家老となり、安永3年(一七七四)前田直躬の没後は前田直方に使え、加増されて一五〇石となりました。

絵の師は明らかではありませんが、現存作品から狩野派に属したと考えられます。一方、中国画や古画の模写も学び、画題も肖像画、道釈

人物画、故事人物図、仏画と幅広いです。

長谷川等伯没後四〇〇年特別展示

●その③「陳希夷睡図」長谷川信春(等伯)

◆第二展示室

イメージーションを楽しむ

【主な作品紹介】

洋画「草叢での対話」堀場良夫 くさむら たいわ ほりばよしお (一九二〇～二〇〇六)

昭和54年制作 当館蔵

壊れたマネキンやガソリン缶などが草叢に無造作に廃棄され、マネキンたちの悲しい会話が聞こえてきそうです。「人間の栄華も一瞬の夢であり、必要が無くなれば全て捨てられる」という、氏のメッセージが込められているようです。

堀場良夫は大正9年

(一九二〇)輪島市に生まれ、二紀展を中心に活躍、平成18年(二〇〇六)に86歳で没した洋画家です。

昭和59年(一九八四)に石川県文化活動奨励賞、平成4年には輪島市政功労者表彰を受けています。



◇観覧料

	一般	個人	団体
大高生	2800円	2800円	2200円

※中学生以下無料、団体は20名以上です。

「春の所蔵品展」

2月26日(土)～4月17日(日)

◇第一展示室

「いきものの表現」

人々は飼育してゐる「いきもの」たちに癒され、厳しい自然界を生きるものたちに、理想の生き方を見るのではないだろうか。

地球上に生息する多種多様な「いきもの」は、人間と別世界の存在ではなく、常に繋がり共存しています。そして時には私たちを映す鑑ともなります。「いきもの」への作家の眼差しは、対象を愛しむように、また、等しく個として対峙するように向けられています。形を正確に捉え、写実に主眼を置いた作品はもちろん、対象の雰囲気や観察のために自宅で飼育し、種としての形のみならず、個体固有の性質をも写し取ります。

具象作品から、抽象化されデザイン化された作品まで、一部寄託作品をあわせ絵画・彫刻・工芸・写真で表現された個性あふれる「いきもの」たちを紹介します。

営み続けられる命の姿をご覧ください。

【主な作品紹介】

日本画「猛虎図」(池田コレクション)
おおはすいせき

大橋翠石(一八六五～一九四五) 明治～昭和前期制作



今年度の友の会会員証に使用した作品です。

大橋翠石は岐阜県大垣市に生まれ、動物画を得意とし、特に虎で高い評価を得ました。

本図は斜面の岩場に爪をたてしがみつき、姿の見えぬ声の主を威嚇するかのように咆哮する姿です。虎のどっしりとした重みを感じられる作品です。



「ベイビー」齊田正一



「とり」中山 実

◇第二展示室

「新収蔵品を中心に」

財政状況が厳しくなっている昨今、当館の作品収集事業は所有者のご厚意により、成立している割合が大きくなっています。

平成21年度は13点、22年度は現在までで14点のご寄附をいただいています。ご寄附いただいた作品は、代々受け継がれ大切に守られてきた古美術や寄附者の蒐集品から、直接作家ご本人からご寄附いただいた現代作品まで多岐にわたります。

本テーマでは平成21・22年度に、新たに寄附いただいた未公開作品をあわせて、絵画・彫刻・工芸・写真を紹介いたします。

【主な作品紹介】

工芸「漆衝立(実り)」
うめついで

番浦省吾(一九〇一～八二) 昭和29年制作
番浦省吾は七尾市生まれ。輪島で2年ほど蒔絵

を修行し、後に京都へ移住。

彩漆での新しい造形表現や、新しい漆芸分野の開拓に取り組みました。

作者が好んだモチーフは珍しいものや、目新しいものではありませんでした。畑に育つ植物や小さな生き物にその目は向けられました。本作では、ずっしりと実をつけた穂を大胆にデザイン化し、根本には小さなカタツムリが配されています。

氏は昭和30年代頃から、代名詞ともなった潮・波・雲などをモチーフとした作品に取り組みましたが、本作はそれ以前の制作となります。



「小景異情」戸淵幸夫



「山水図」亀倉海屋



◇観覧料

	一般	個人	団体
大高生	350円	280円	220円

※中学生以下無料、団体は20名以上です。

市民ギャラリー催し物案内

海江田波留美展「紙・墨・筆とともに」

無料 入場

1月19日(水)～23日(日)

但し、最終日は午後3時まで

墨で抽象を描き始めて45年、この25年は主に世界で発表活動をしてまいりました。急展開で金沢で個展が決まり、それならやはりゆかりのある能登へも、という事になり、お目にかかりにまいります。

主催・連絡先 海江田 波留美 ☎0466(25)3741

能登風光 ―海と織りなす―

無料 入場

3月18日(金)～21日(月・祝)

能登半島周辺の変化に富んだ海岸線に魅せられて、15年ほど写真撮影を続けてきました。岩礁、冬の荒れる海、四季の美しさ、人々の営みなど30点程の作品を展示します。能登の風景・風土を感じていただければ幸いです。

主催・連絡先 須釜 聡 ☎076(244)5865

ボローニャ展報告

11/6(土)、開会式での、あかくら保育園あお組(年長児)さん19名による記念演技披露「星のメロディー」で始まった今年のボローニャ展。多くの方にご来館いただき、31日間の会期を無事終えることができました。

関連事業も賑わいました。毎週土日に「絵本の会 もこもこ」さんの協力で開催した「かんたん絵本を作ろうよ」は127名の親子にご参加いただきました。番外編として11/23(火・祝)を誰でも参加できる日としたところ、大人12名子ども15名もの参加がありました。11/21(日)には「NPO法人ぽっかぽか」の会員さん7名による「おはなし劇場」で、絵本の読み聞かせや大型紙芝居、ブラックシアター、人形劇と盛り沢山のプログラムに加えて『ぐりとぐら』の人形作りワークショップも行いました。また、これまで金曜日の夜に開催してきた「ナイトミュージアム」も土曜日(11/27)に変更し、10家族42名の参加で和気あいあい。家族の会話で少し賑やかな展示室となりました。

2011年のボローニャ展をお楽しみに。



当館所蔵品貸出情報 (1月1日現在)

●彫刻「鳥」 田中太郎作

展覧会名…「加越能の美術

―明治から現代の絵画・彫刻・工芸―

会場…石川県立美術館

会期…1月4日～2月6日

《作品について》

グッと見据えられた目が、小憎らしくも生命の力強さを感じさせる作品です。作者の田中太郎(二九一～九二)は七尾出身の彫刻家。



材質 木彫彩色
制作年 昭和11年(1936)
出品 第23回院展

平成23年度 石川県七尾美術館友の会会員募集のご案内

新年度友の会会員を次の要領で募集いたします。現在会員の方で更新をご希望される方は、改めてお申込みください。お申込みのない場合は、そのまま退会となっておりますのでご注意ください。

★入会手続き★

①受付開始 3月1日(火)から(年会費一、〇〇〇円)

②受付場所 当館受付カウンターまたは郵便受付

(郵便振替用紙をご利用ください)

※郵便局備え付けの振替用紙の通信欄に必要事項(会員の区別(更新・新規・元会員)・郵便番号・住所・電話番号・氏名・生年月日)をご記入のうえ、会費を添えてもよりの郵便局窓口へお出しください。払込料金120円は申込者負担となります。

郵便振替口座 00710-0050795
加入者名 石川県七尾美術館 友の会

友の会に入会すると…こんな特典があります！

その1 当館主催展覧会の観覧料が割引になります。

その2 情報満載「美術館だより」(年度内4回発行)が郵送されます。

その3 相互割引提携館主催の展覧会観覧料が割引になります。(会員本人のみ)

※相互割引提携館(石川県立美術館/石川県立歴史博物館/金沢市立中村記念美術館/石川県能登島ガラス美術館/七尾城史料館・懐古館/能登国分寺展示館/中島お祭り資料館・伝承館/明治の館(室木家)/石川県輪島漆芸美術館/珠洲市立珠洲焼資料館)

その4 特別企画展開会式・内覧会へご招待。(無料)

その5 販売グッズが割引になります。(一部除く)

その6 喫茶室利用補助券がもらえます。(50円×3枚)このほかにも友の会会員限定の催し、特典がありますのでぜひご更新、ご入会ください。

◆長谷川等伯没後四〇〇年を ふりかえって◆

《七尾美術館編》

「複製 松林図屏風」お披露目公開

等伯の代表作で国宝人気ナンバー1と名高い「松林図屏風」の、限りなくオリジナルに近い複製画が完成し、5月2日にお披露目セレモニーを開催、地元中学生から喜びのコメントもいただきました。

また、5月2日～5日、10月31日～11月3日に無料で一般公開されました。実物は頻繁に見ることが出来ない名作であり、複製ながら吟味して製作された作品をご覧になった方々からは、「本当に本物と見間違ふほど」「複製でも、ゆつくり見られてよかった」とのお声をいただくことが出来ました。



5月2日の「複製 松林図屏風」完成披露会場

しかしながら、複製とはいえエディケートな素材です。出し続けると早く傷んでしまいます。今年から美術館での展示は、基本的に展示室内で年に2～3ヶ月以内とさせていただきます。皆様ご理解の程、お願い申し上げます。

「等伯をめぐる画家たち展」

昨年（平成22年）、東京国立博物館で2月23日～3月22日まで、京都国立博物館では4月10日～

5月9日まで、大回顧展「長谷川等伯展」が開催され、東京会場約29万人、京都会場約24万人という大変な入館者数を記録しました。ほとんどの等伯作品が出品されるため、七尾では4月24日～5月30日まで「等伯出身地ならではの企画展」ということで、「等伯をめぐる画家たち」展を開催しました。

東京・京都展の影響もあり、全国から等伯ファンが来館、「等伯の郷里へ行ってみたい」なってきた「能登の時代のこと」を知らなかった、詳しく分かって良かったなどの言葉をいただき、中には「松林図屏風の風景を探しに来ました」と真剣な眼差しで語る方もいらして、改めて反響の大きさと等伯の偉大さを感じました。



「等伯をめぐる画家たち展」展示室風景

☆子どもも大人も等伯を学んだ一年☆

昨年はさすが特別な年ということで、多くの団体から等伯の講演や講座の依頼がありました。

また、大人の方では個人や団体で東京展・京都展へ足を運ばれた方々も多く、皆さんの「学び」の心や、等伯への「誇り」や「愛情」が伝わってきました。

さらに、小中学生は美術館を訪れ、展覧会鑑賞やクイズにも参加しました。特に市内小学校5・6年生は学校でも等伯を学び、等伯の菩提寺を訪ねたり、等伯検定「めざせ！子ども等伯博士」に挑戦したりと、郷里を同じくする偉大な画家

に触れ、改めて等伯を誇りに思ったのではないだろうか。一部の学校では、水墨画の授業を実践したり、

昨年はまさに「等伯年」でした。



イメージキャラクター「とうはくん」

「備えあれば…」 このたびAEDが設置されました」

「大丈夫ですか！」「だれか手伝ってください！」普段の生活の中で、あまり大きな声を出すがありませんから、皆、少し戸惑いながらの第一声。これが昨年の普通救命救急講習会でした。

会場の七尾鹿島消防本部で、講師の救命救急士から「もしも美術館で人が倒れたら」という設定で、心肺蘇生法とAED（自動体外式除細動器）の使用事例、実際の使用方法についてご指導いただきました。最近ではAED設置施設が増えており、身近によく見かけるようになりましたが、いざという時に使う方がわからなければ、救える命も救えないという非常に残念なことになります。

七尾美術館は、年間5万人近くの方々に利用していただいていますから、万が一の事態に備え、「二日も早くAED設置を！」と切望する中での受講でしたが、職員だけでなく、ボランティア監視員さんにもとお声かけをしたところ、積極的にご参加くださり、総勢15名での参加となりました。

受講して改めて感じたことは、適切な心肺蘇生法が非常に重要であるということ。そして、倒れた人を助けるためには、周りにいる人の協力がいかに必要であるかということです。

救急車に連絡する人、AEDを取りに行く人、心肺蘇生法を交替して実施する人、どれをとっても、一人で全部行うことは、とても困難です。

緊急事態やAEDを使用する必要のないのが最善ですが、皆様に安心してご利用いただけるよう、これからも施設管理や訓練等を怠りなく実施していきたいと思っております。



長谷川等伯展講演会報告

「等伯をめぐる人びと」

講師 嶋崎 丞(当館館長)



今年には長谷川等伯が没してちょうど四〇〇年という記念の年です。東京や京都の国立博物館で大展覧会が開かれるなど最近等伯が大きく注目されておりますが、開館以来等伯を重要なテーマとしてきた当館でも、「等伯をめぐる画家たち」という展覧会を開催しております。そこで本日は、等伯周辺の人々についてお話をしたいと思います。

一、「涅槃図」にみる長谷川一族①

無分・宗清・等伯の場合

長谷川等伯とゆかりの深いお寺である京都の本法寺に所蔵されている『等伯画説』には、等伯を巡る系図が書かれています。それによると①雪舟↓②等春↓③無文↓④宗清↓⑤等伯となり、これをもつて等伯が「雪舟より五代」と自称しているのはよく知られますが、5人を順番ではなく無文と宗清と等伯は横並びに書かれているんですね。私はこれが重要なポイントだと思うのですけれども、雪舟と等春は年代に差がありますから順番ですが、無文は等伯の養祖父・宗清は養父とされているので無文・宗清・等伯は年代が近く、この表記は3人が同時期に活躍していたことを表しているのではないか、という気がいたします。

今から約50年前の昭和41年から43年まで、約3年をかけて能登地区の文化財総合調査を実施しました。その時の私の記録では、印象に残った作品の1点が七尾市の長壽寺が所蔵する「涅槃図」で、「室町時代後期制作と思われる大変な秀作であるが、捺されている印章は判読不能」とメモされています。その後松原茂先生がこの印章を「無分」と解説され、『等伯画説』の「無文」は「無分」であり、長壽寺本は等伯の養祖父の作品であるとされました。私もそれで間違いないと思います。

そして調査の時、もう1点気になったのが穴水町の来迎寺所蔵の「涅槃図」です。この構図が長壽寺本と非常に似ているんですね。画面中央の釈迦や周りの人物・動物達の描き方や配置など、まるで敷き写しをしているのではないか、と思う位です。制作年代は長壽寺本が少し古いようであるから、来迎寺本は長壽寺本を写したのであるという結論となりました。

来迎寺本には「長谷川藤原」という落款と判読不能の印章があります。落款については羽咋市の正覚院所蔵の等伯筆「十二天図」にある、「藤原長谷川信春廿六歳筆」の落款と書き方が非常によく似ているんですね。詳細に見ますとやや筆法が異なるんですが、小さい字で「コ」が連続して書かれている感じが、小さいものを感じました。調査時のメモでは「十二天図」と非常に良く似た落款が書かれているので、他の等伯作品とも比較検討する必要があります。今改めて思うことは、等伯は来迎寺本を真似て「十二天図」の落款を書いているのではなからうか、ということですね。近年の研究では判読不能の印章が漢字2文字で、上の文字は「宗」ではないかとされていることもあり、来迎寺本は等伯養父の宗清が描いた作品である可能性が、非常に高いのではないかと思います。

等伯も30歳の時に羽咋市妙成寺所蔵の「涅槃図」を描いております。この妙成寺本と長壽寺本・

来迎寺本を比較してみると、非常に良く似たところがあるんですね。等伯は妙成寺本を描くにあたって長壽寺本・来迎寺本を手本にしている可能性は高いと思われます。ただ詳細に見ると多少異なるところもありますので、等伯は長壽寺本・来迎寺本を参考としながら構図を考えて下図を描き、彩色にアレンジを施しながら、妙成寺本を描いたのではないかと思います。

このように見えてくると、長壽寺本は「長谷川派涅槃図」の原点だと言えるのではないのでしょうか。先に無分・宗清・等伯が同時期に活躍している可能性を言いましたが、想像を逞しくすると、宗清が来迎寺本を描く時に、長壽寺本を参考にしたことを等伯に語った、若しくは制作の様子を若き等伯が見ていたのではないか、という気がします。それ程近い存在であるからこそ、『等伯画説』の系図では3人を横並びに書いたと思うのです。

等伯の涅槃図としてもう1点著名なのが本法寺所蔵の「仏涅槃図」です。本法寺本は大幅で大きさは異なりますが、妙成寺本が原本であるように見えます。両図を比較すると確かに本法寺本は画面の大きい分、配置換えなども行われていますが、やはり共通点を見ることができると思います。ですから、本法寺本にも無分・宗清の涅槃図の雰囲気を受け継がれていると言っても良いでしょう。

二、「涅槃図」にみる長谷川一族②

長谷川等誉の場合

等伯より後にも「長谷川派」の涅槃図は描かれています。その中で七尾ゆかりの絵師が長谷川等誉です。等誉も現在4点の涅槃図を残しており、その中で最初が慶長4年(一五九九)制作の成蓮寺本です。画面各所に色指定などの書き込みがあり、それらを観察すると成蓮寺本は長壽寺本の模写であることが分かります。等誉は長谷川一族で等伯に近い存在だったとも言われており、或いは等伯から

「私は長壽寺本・来迎寺本を参考に妙成寺本を制作した、お前も同じように学んだ方がいい」とのアドバイスを受け、そのことが成蓮寺本制作の契機となったような気がしております。

次に慶長12年（一六〇七）頃制作の東嶺寺本です。東嶺寺本は成蓮寺本に比べて沙羅双樹の場所を変えるなどあちこちに変更箇所があり、成蓮寺本をベースに自分の画風へ一歩前進させた印象を受けます。

そして次が慶長14年（一六〇九）制作の本延寺本で、全体として装飾的で東嶺寺本をさらにアレンジして描かれています。大幅でありながらタッチも見事で、等誉の充実した時期に描かれた傑作だと思えます。もしかすると等誉は等伯が本法寺の涅槃図を描いたという情報を聞き、本法寺まで赴いて見た可能性もあります。そして一族の菩提を弔うため、本法寺本を参考に大幅の涅槃図を描いたのでは、という気がいたします。

最後が山田寺本です。本延寺本に次ぐ大きさですが、画面の大きさに比べて描かれている人物や動物が小さく、余白が目立ちます。制作年ははっきりしないのですが、描き方などから判断すると本延寺本よりも後で、等誉が亡くなる寛永13年（一六三六）に近い頃の、晩年期制作の作品になるかと思われま

す。等誉は涅槃図以外にも作品を残しています。中でも注目されるのが妙成寺所蔵の「松・杉・楓図屏風」で、等誉がこのような金碧画を描いているという点に大きな意味があります。この作品は金地に緑青を中心に色数を抑えて見事な構成で描いていますが、このような絵は地方にいただけでは描くことの出来ないスタイルなんですね。室町時代の終りから桃山時代の初めにかけて浜松図という大和絵の画題が流行いたしますが、等誉はその技術をちゃんと汲み取っていたように思えます。ですからやはり等誉は京都へ行ったことがあり、浜松図など

の名作を実際に目にしたのではないかと考えられるのです。もしかするとその時、等伯から「お前は郷里で長谷川家のために頑張つて欲しい」と言われたのかも知れませんか。

三、等伯一門の絵師たちと金碧障壁画

等伯の家族については、等伯研究の大家である山根有三先生がまとめられています。それによると等伯は先妻・妙浄と後妻・妙清の2人の奥さんを娶っており、妙浄には長男久蔵・二男宗宅の息子2人と長女妙円・二女宗伯の娘2人、妙清には三男・宗也と四男・左近の息子2人がいました。そして長女妙円には等秀、二女宗伯には等学をそれぞれ娘婿として迎えています。この2人は等伯が弟子の中から自分の右腕となりうる人材を選んだのでしょう。また、等伯には多くの長谷川を名乗る弟子達がいたとされ、山根先生は色々と調査されて10人ほどの名前を挙げておられますし、この他にもいたと思われま

す。この一族や弟子達を率いて等伯は制作を行ったのであり、現在も長谷川一門が力を合わせて描いたとされる作品が残っています。今回の展覧会ではその内京都市の妙蓮寺、そして禅林寺の障壁画が出品されています。

まずは「妙蓮寺障壁画」ですが、金碧の雄大な画面であり、桜の花の部分には胡粉盛り上げの技法を使つて叙情的雰囲気を加えています。山根先生は空間の取り方などが少し間延びしているという理由から、制作年代をやや下げて等伯は関与していないとし、作者について等伯の娘婿である等秀や等学とされています。しかし私は胡粉盛り上げの表現に、久蔵筆の京都市智積院所蔵の「桜図」に通じる雰囲気を感じるんですね。確かに画面構成などは「桜図」と比べると素朴な印象を受けるのですが、やはり桃山時代的な華やかさがあり、智積院の障壁画と同じ頃の制作にしても良いのではないかと

四、等伯四男・長谷川左近さこんについて

今回の展示では、等伯4人の息子の内、四男とされる左近の作品も出品されています。左近は金沢に作品を残しておりまして、「達磨図」はその1点です。これは等伯が描いた岡山県立美術館所蔵の「芦葉達磨図」と共通点が見られまして、左近はこの作品を参考に描いたのではなからうかと思えます。但し、線描などは等伯というよりもむしろ俵屋宗達などの「琳派」的なものを感じさせ、その影響を受けたとも考えられます。

もう1点は金沢市の大乗寺所蔵の「十六羅漢図」です。水墨ですがこのタッチが特徴的な烈しい筆使いで描かれており、岩や樹木の表現などは等伯晩年期の水墨画に近いものがあります。この作品を見ていると等伯は末子の左近に期待するところがあるのではないか、そして左近もそれだけの自負心を持って制作をしていたと思えます。だからこそ等伯に続いて「雪舟より六代」を名乗ったのではないのでしょうか。

※本文は平成22年5月9日に行われた「等伯をめぐる画家たち展」特別講演会の内容を当館の責任においてまとめたものです。



これからの展覧会予定



◆第1・2・3展示室

「石川県七尾美術館収蔵名品展」(仮称)

平成23年4月23日(土)～5月22日(日) 会期中無休

平成7年の開館以来、当館では数多くの美術工芸品を収集してきました。現在、所蔵品が約550点、寄託品が約60点の計約610点が収蔵されています。

その内容は「池田コレクション」170点を中心に、長谷川等伯作品など地元にも古くより伝来する文化財、そして能登地方ゆかりの近現代作家による作品など、多岐にわたっています。

何れも後世に残すべき優れた作品ばかりであり、本展では当館収蔵品より中世から現代に至るまでの各作品を幅広く紹介いたします。



「涅槃図」無分筆
七尾市 長壽寺蔵

●収蔵庫及びアートホール楽屋増築に関するお知らせ●

前号でもお知らせしましたとおり、収蔵庫及びアートホール楽屋棟の増築工事を着工いたします。

工事期間中においても、展覧会はスケジュールどおり開催する予定ですが、工事の日程・内容によっては臨時休館する場合がありますので、ご来館の際には事前にお問い合わせくださるか、当館ホームページでご確認ください。

また、アートホールは楽屋棟完成までの間、貸し館のご利用はできません。

皆様には、ご不便、ご迷惑をおかけいたしますが、ご理解いただきますようお願いいたします

完成予想図

約138㎡の
収蔵庫



楽屋2室、ピアノ保管庫、トイレ、給湯室他を備えた楽屋棟



割引、プレゼントなど特典いろいろ！ぜひ当館でもご利用ください。



飛行機……能登空港から能登有料道路利用約45分
車……金沢から能登有料道路利用約1時間15分
タクシー……JR七尾駅から約5分
徒歩……JR七尾駅から約20分
市内循環バスまりん号
……JR七尾駅前「ミナ・クル」ビル裏バス停から西回り「七尾美術館前」下車
なおコミュニティバスぐるっと7
……JR七尾駅前5番乗り場から西コース「小丸山台1丁目」下車

休館日のお知らせ

1月～3月

◆1月 1～3,11,17,24,31

◆2月 7,14～25,28

◆3月 7,14,22,28

◎次号・第65号(春号)は4月1日発行予定です。